

# 成果報告書

記入日 2018年 7月 16日

氏名	佐藤 恵子	渡航先国名	タイ	所属機関	上智大学 アジア文化研究所／アジア人材養成研究センター
研究テーマ：地方からみるアンコール王朝史の再構成：タイに広がるアンコール遺跡群の碑文・建築学的検証					
研究期間：2015年 12月～2018年 3月					
<p><b>研究成果（概要）</b>：報告者は、タイで確認されている全てのクメール碑文の字訳を行うとともに翻訳と分析を進めてきた。その結果、アンコール王都の碑文とは異なる表現と字体が確認できた。この点こそが、タイという地域もしくは碑文作成者の特性と考えられ、現在も引き続き分析を進めている。また本研究を通して、タイ人研究者との共同研究の基盤を築くことができた。報告者は、留学で得た知識と経験を基に、タイとカンボジアを結びつける研究者として、東南アジア古代史研究に貢献していく所存である。</p>					
<p><b>研究成果（詳細）</b></p> <p><b>1) 史料調査 [バンコク, パトゥンタニー]</b></p> <p><u>2015年12月～2017年11月</u></p> <p>国立図書館および国立博物館において、クメール碑文を含むタイ所在の刻文の所在の確認および分類作業を行う。また、手に入れることができたクメール碑文の史料の分析を行う。2016年9月に国立図書館所蔵の拓本史料閲覧の許可を得て、クメール碑文の書写も開始する。</p> <p><u>2017年11月～2018年2月</u></p> <p>シルパコーン大学、サンスクリット・スタディーズ・センター（SSC）所蔵の拓本史料閲覧の許可を得て、クメール碑文の書写を行う。</p> <p><u>2018年2月26日</u></p> <p>国立博物館の収蔵庫にてクメール碑文の調査を行う。しかし時間的制約により、予定していた調査を全て行うことは不可能であった。</p> <p><b>2) フィールド調査</b>（※2017年、タイ側の外国人研究者受け入れシステムが変更された。これにより当初予定していた水利設備を伴うクメール遺跡の調査は、時間的制約により実施は不可能となった。）</p> <p><u>2016年2月21日～2月27日：カンボジア、ラオス</u></p> <p>カンボジアのプレア・ヴィヘア州およびラオスのチャンパサック州・パクセー州においてクメール遺跡の調査を行う。これらの地域から確認された碑文は、特に10世紀～12世紀末にかけての官僚・有力者層の様相を記しており、本研究対象であるタイにおける官僚・有力者層との良い比較材料となった。</p> <p><u>2016年6月～11月</u></p> <p>—6月21～24日：ロップブリー（Lopburi）、チャイナット（Chainat）、シンブリー（Singburi）、アントン（Angthong）</p> <p>—7月25日～29日：スコタイ（Sukhothai）、カンペンペット（Kamphaengphet）、タック（Tak）</p>					

—8月14日～20日：スコータイ、ピッサヌローク (Phitsanulok)、ペッチャブーン (Phetchaboon)、ウッタラディット (Uttaradit)

上記の行程で芸術局の視察に同行した。地方文化に対する理解が深まっただけでなく、各地の学芸員との交流を通して、ブラーフミー文字、ランナー文字、スコータイ文字の知見を深めることができた。



写真1. ムアン・シン [カンチャナブリー]



写真2. ラーマカムヘーン碑文 [バンコク国立博物館蔵]



写真3. ラーマカムヘーン碑文レプリカ [スコータイ]

2017年18日～25日：アッサム [インド]

—11月19日～21日：シルパコーン大学の教授と共に、アッサムでの第1回国際会議 [“Archaeological Heritage of South Asia”] に参加した。東南アジアの歴史は、インドと深く関係している。会議に出席したインド古代史研究者と東南アジア史について意見交換を行うことができ、彼らと非常に有意義な関係を築くことができた。

—11月22日～24日：ヒンドゥー寺院およびタイの村へ踏査を行った。アンコール時代、ヒンドゥー教は中心的な宗教であったが、現在では確認できない。歴史的建造物での「生きた」ヒンドゥー信仰を、インドの地で触れることができ、アンコールの宗教を考察するにあたって非常に良い参考事例となった。

### 3) その他

2016年11月末～2018年3月

シルパコーン大学の教授たちと共に、クメール碑文の分析を行う。クメール碑文は、サンスクリット語と古クメール語で記されているが、それぞれの言語の専門家と共に翻訳および注釈作業を行った。



写真4. サンスクリット語勉強会

2018年1月28日

国際サンスクリット会議 [“Sanskrit and Sanskritic Indology in Southeast Asia”]

にて、“*Barays in Angkor: Stanzas about taṭāka, which contain the names of kings, and mebon*” のテーマで発表を行った。同タイトルの論文は、SSC 発行ジャーナルで掲載予定である。

### 【調査研究詳細】

#### 1) タイにおけるクメール碑文の調査に関して

タイ所在の文字史料に関するデータは、国立図書館での調査が済んだものは、Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Center (SAC) のHPにて基本的に公開されている。その内、大部分のクメール碑文は閲覧可能であるが、所在情報等の更新はされておらず、またデータや字訳等の誤りも訂正されていない。

また、報告者の留学期間中は折しも国立博物館の改装中であり、刻文セクションに展示されていた碑文のほぼ全てが収蔵庫に移転され、オリジナルの碑文に接する機会は極めて制限された。

タイにおいて碑文調査を行う際は、以下を踏まえたうえで実施する必要がある。

- ① 拓本史料は、国立図書館とSSC(一部)が所蔵している。しかし国立図書館では、基本的に既に出版物に掲載されている場合は閲覧不可である。他方で外国人は、拓本史料データの購入は不可であるが、図書館所蔵の碑文の写真データは購入可能である。

②外国人研究者は、基本的に収蔵庫調査に入ることは難しい。また調査許可だけでなく撮影許可を得たとしても、碑文によって撮影が禁止される場合もある。さらに写真データは、如何なる場合においても、使用の際には、収蔵庫、国立博物館、芸術局の許可がいる。

③通常、クメール碑文は「K」もしくは「Ka」を番号に付す。しかしタイで確認された刻文は、出土地に従ってインベントリーナンバーが付与されている。これらの照合作業は計画的に行われているわけではないため、改めてオリジナルデータを基に確認する必要がある。

## 2) クメール碑文の書写・翻訳・分析を通して

現在クメール碑文は、約 1300 点が確認されている。その内、タイ所在の碑文は、現在公表されているものでは約 150 にのぼる（※コイン等の刻文は除く）。報告者は、国立図書館と SSC での拓本史料の閲覧許可を取得し、それら全ての書写・字訳を行った。

クメール碑文の研究は 19 世紀末から始まり、新たに発見された碑文も含めて、そのほとんどが翻訳されている。しかし、本調査を通じて、誤った字訳を基に翻訳されているものが数多くあることが確認できた。報告者は、改めて行った字訳を基に碑文の翻訳と分析を行った。以下は現在まで作業した主な碑文であるが、これらは王都との関係および地域の特性を検討するうえで十分な情報量を備えている。



写真 5. カオ・ノイ碑文  
[バンコク国立博物館蔵]

- ・ Sri Canasa Ins. [937 年, アユタヤ] ジャヤヴァルマン 4 世が統治していたアンコール地域とは異なる王朝の存在を示す。
- ・ Mueang Sema Ins. [971 年, ナコーン・ラーチャシーマー] ジャヤヴァルマン 5 世およびヤジャンヤバラハ（※アンコール地域バンテアイ・スレイ寺院建造者）の名前が確認できる。
- ・ Aup Muang Ins. [993 年, ウボン・ラーチャターニー] ジャヤヴァルマン 5 世の命の下での寄進。
- ・ Pr. Thap Siam Ins. [1007 年, サケーオ] スーリヤヴァルマン 1 世から碑文作成者への贈与等。
- ・ Sdok Kok Thom Ins. [1052 年, サケーオ] スーリヤヴァルマン 1 世からウダヤーディティヤヴァルマン 2 世に仕えた人物による碑文。アンコール王朝創始より続く家系であると主張。
- ・ Pr. Phanom Rung Ins. [1150 年, ブリーラム] スーリヤヴァルマン 2 世の賛辞と系譜とともに、王と名のるヒランヤヴァルマンの存在も確認できる。

タイ所在のクメール碑文の内、特に上記のものは当時の王と碑文作成者との関係が明示されているだけでなく、碑文作成者の思想と業績も記されており、そこにアンコール王都とは異なる表現も見出すことができる。王とタイ地域における有力者層との関係は如何なるものなのか。報告者は、引き続き翻訳等の作業を進めるとともに、アンコール王都の碑文との比較分析を通じてこの問題を検討していく。

他方、報告者は、この書写作業を通して碑文毎の文字表作成を進めている。クメール碑文に限らず、文字は時代毎に形状が変化する。これは、紀年が確認できない碑文の年代を推定する手段の一つとされてきた。文字表は、フランス極東学院が抽出碑文を基に既に作成しているが、報告者が進めている作業によって、より確かな根拠に基づいて、時代だけでなく、地域性を明らかにすることが望める。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

報告者は留学中、タイ人の「文字」に対する高い意識と誇りそして複雑な思いに触れてきた。文字は、特に新興国であるタイにとっては歴史のルーツにも関わる非常にデリケートなアイテムであり、外国人が文字史料を研究することは極めて難しい。タイ人は、ラーマカムヘーン碑文を通してタイ文字に対する高い意識を示している。私たちは、それを博物館の展示構成等において見るることができる。この自文化に対する高い意識は、国家もしくは王室特にラーマ9世に対する敬愛表現を通して見ることもできよう。例えば、ラーマ9世がご崩御された2016年10月13日以降、服装が最も顕著な変化を見せた。タイでは曜日毎に色が決められており、それに従った服を着用する者も多い。その色彩感覚豊かな国民が、喪服もしくは黒服をその後1年間着続けた。ご崩御翌日には、黒服を売り出した屋台では人が群がり飛ぶように黒服が売れ、ショッピングモールのディスプレイも全て黒色となった。また、服を黒色に染めるサービスも見受けられた。公的な場に居合わず際の黒服着用の義務化は徐々に厳しくなっていき、さらに様々な場面・所作が極めて儀礼的であった。このように文字や王室文化は、公的には理想を追求し厳しく模範に律せられ、人々はそれに準じた生活を送っている。



写真 6. 記帳参拝風景  
(2016年10月15日)

しかしその一方で、彼らと接すると冷静かつ客観的な意識にも触れることができる。まず、文字史料のルーツや整合性に関して、公的な表現を尊重しつつも極めて論理的であることが挙げられる。また、葬儀関連行事において、報告者は報道されたようなもしくは自分が予想していたような感情的な場面には一度も出くわさなかった。居合わせた人々との会話や彼らの行動は冷静であり、むしろ一種の行楽行事のような様相であった。

報告者は、タイの国民性について語れるほどの知識と経験を持ち合わせている訳ではない。しかし、研究生活の上で日々感じた葛藤および僅かながらの非日常的な出来事から、タイの人々の国家や文化に対する公的・私的な意識双方に触れることができたと感じている。これは、文献だけでは得られない感覚的な知識であり、この点において報告者は今回の留学を通してかけがいのない経験を得た。

## 今後の社会貢献

東南アジア古代史において、アンコール王朝は大きな影響を与えた。その勢力範囲は、現在のタイ、ラオス、ベトナムにまで広がる。これまで報告者は、これらの地域に点在するクメール遺跡の調査も行ってきたが、カンボジアを主なフィールドとして研究を進めてきた。現在、一定地域の文字や言語に拘り閉鎖的な研究傾向にある歴史研究も、学際的研究の影響を受け、より広域的な研究が求められている。報告者はタイ留学を通して、タイにおけるクメール碑文研究の基盤を築いただけでなく、タイ人研究者との共同研究を行う下地を築くことができた。報告者は、これまで築いてきた研究データおよびカンボジア人研究者との関係を基に、さらにタイ人研究者との関係を強めることによって、カンボジア、タイ、そして日本による共同研究を行うことを計画している。タイとカンボジア間には政治的・歴史的対立問題が依然存在している。両地域を知る報告者が、2国間のコーディネーターとして彼らと広域的な視点で共同研究を進めることによって、クメール史だけでなく東南アジア古代史研究において、より大きな成果を生み出すことが期待できる。